

「肯定的なもの」への共感 パッパノーとウォン 名演の粹

モスクワの6月は太陽が照りつけ、北国の印象に反してずいぶん暑くなる。かの地で暮らしていた2007年、忘れられない演奏会に出合った。ローマのサンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団のレスピーギ《ローマの松》。指揮はこの9月、ロンドン交響楽団を率いて来日したアントニオ・パッパノーだった。

「ジャニコロの松」で響いたクラリネット・ソロは、グラスの中で輝きをみせる赤ワインのような趣があり、ほの暗いロシアとも異なり、これがイタリアの音かと思わせた。ナイチンゲールの鳴き声も生々しく、「アップピア街道の松」では、これもイタリアならではのずっしり感のあるト

ロンボーンが美しく響いた。

「私は20年ほど前、モスクワに住んでいてマエストロの演奏を聴いたのです。シヨスタコーヴィチやブルックナーをめぐるインタビューを終え、立ち上がりながら伝えると、パッパノーは微笑んだ。「コロンヌイ・ザール（円柱のホール）ですね」と、会場名をロシア語で言う。こちらでもロシア名を繰り返す。時が一挙に縮まった。

《復活》第1楽章の光の旋律

今回の来日公演は、マーラーの交響曲第2番《復活》、シヨスタコー



マーラーの《復活》を演奏するパッパノー指揮ロンドン交響楽団。合唱は東京混声合唱団（9月30日、フェニーチェ堺。©飯島隆）

厳しい弦のトレモロと、弓が飛ぶようなバスの激しい動きで始まったが、暗黒の中からヴァイオリンによって立ち上がり、弱音で奏でられる第2主題が、実に美しく、温かく響く。同時期の東京の別の演奏はもとより、多くの演奏では経過のエピソードとして進むところが、パッパノーの指揮では、「それでも光は存在しますよ」とでもいうかのよう

シヨスタコーヴィチから 聖堂の響き

シヨスタコーヴィチも同様で、「暗」の世界に埋め込まれ、第1楽章ではハープに先導されて響く長調旋律がいと

3楽章では、慟哭が響く。だが、結びの弦とハープ、チェレスタのピアノシモの和音には、確かな人のぬくもりがある。

緊張からの「解放」と話したが、これもまた「光」であり、希望とも呼べるだろう。

経緯は分からないが、歴史的な場であることは確かである。そこは何より、1953年にスターリンの葬儀が行われた会場として記憶され、多くの映像に残されている。独裁者のような「暗」や、悪と呼べる存在は、日常のすぐわきにある。パッパノーの指揮は、そうした現実の中にあっても人間が示すことのできる可能性を表しているように感じられる。



シヨスタコーヴィチの交響曲第5番やブルックナーの9番についてインタビューに答えるパッパノー ©藤本崇

パッパノーが19年前、《ローマの松》を演奏した「コロンヌイ・ザール」は、ふだんは音楽会が開かれる場ではない。サンタ・チェチーリアやドレズデン・フィルが招かれ、ロシアからはサンクトペテルブルク・フィルが参加した「世界のオーケストラフェスティバル」の会場に選ばれた。

ねるということ。神への道はフォルテでなく、ピアノシモを通じてこそ進むことができる発見が「終楽章コードである」という言葉は、とても説得力があり、含蓄が深い。

《レニングラード》交響曲 際立つドルチェの表現

指揮者の存在は大きい。その解釈によって、ふつうに聴くときとは異なる作品の風景をみせてくれる。カーチン・ウォン指揮日本フィルのシヨスタコーヴィチの交響曲第7番《レニングラード》もその好例だった。

困難や現実を見つめつつ、そこから人が前に進むための励ましを与える音楽。ウォンと日本フィルの《レニングラード》交響曲の演奏は、多くの人の心に刻まれた。



《レニングラード》交響曲の公演ゲネプロで指揮をするカーチン・ウォン ©山口敦